

(共同研究：地域文化資源の掘り起こしと活用の研究)

日本仏教揺籃の地としての南大阪（七）

行基の足跡（2）

梅 山 秀 幸

煉獄の誕生

学生時代、三年ほどのあいだ、大学に出講されていたイタリア人神父のベンチヴェニニ師のダンテを講読する授業に出ていたことがある。私なりに熱心に取り組んだので、今も時おり、ふとしたきっかけで『神曲』の数節が思い浮かぶことがある。たとえば、その冒頭。

Nel mezzo del cammin di nostra vita
mi ritrovai per una selva oscura,
che la diritta via era smarrita.

(われらが人生の道のりの半ばにて、
わたしは真っ暗な森の中にいた、
正しい道を踏み外してしまい)

ダンテ・アリギエリは西暦1265年に生まれ、1321年に没した。ダンテは人の一生を七十年と考えていたふしがあって、三十五歳の1300年がその中間地点、しかもダンテ自身、その年にはフィレンツェ市の統領の一人に選ばれたものの、翌年には追放されて、二度とフィレンツェに足を踏み入れることはなく、ラヴェンナで客死することになる。暗い森の中にいて、正しい道を踏み外してしまった人生の道のりの半ばというのは1300年のことになる。ダンテの彷徨も、そして『神曲』もそのころを起点として始まり、地獄（Inferno—イタリア語 以下同）篇、煉獄（Purgatorio）篇、そして天国（Paradiso）篇の三部から構成される。ヴィルジリオに導かれて地獄と煉獄をめぐり、ベアトリーチェに迎えられて天国をめぐり歩く。人びとの死後の空間が垂直に位置づけられて三つ存在すると、ダンテは考えていることになる。

ところが、かつて煉獄など存在しなかったと、フランスの歴史学者のジャック・ル・ゴフは断言する。

キーワード：煉獄の誕生、寺院と高利貸し、平泉澄、水間寺、孝恩寺の仏像群

十二世紀の終わりまで“purgatorium（煉獄—ラテン語）”という名詞は存在しなかった。だから、Purgatoire（煉獄—フランス語）は存在しなかった。（『煉獄の誕生』“La naissance du Purgatoire” Gallimard, 1981. page12）

poenae purgatoriae（浄めるべき罰）、tormenta purgatoria（浄罪の苦しみ）、さらには ignis purgatories（浄罪の火）というように、purgatori—の形容詞としての用法はあったものの、名詞として用いられることはなかった。それが名詞として用いられるようになるのは1150年から1250年のあいだ、さらに狭く限定すると1170年から1180年のあいだ、パリのカルチエ・ラタンにたむろする神学者たちによってのことだと、ル・ゴフはいう。名詞が生まれることによって、そのことばが指示する実体が生まれることになる。そのときまで、人は死後、天国に祝福されて迎えられて至福の生を送るか、地獄に落ちて永遠に業火に焼かれ続けて過ごすか、二者択一しかなかった。それが何らかの形で罪を浄化することができれば、天国に迎え入れられることになり、そのために浄化する場、空間が誕生したということになる。『神曲』の地獄篇を終えて煉獄篇の冒頭の二節目。

e cantero di quell secondo regno
 Dove l'umano spirito si purga
 e salire al ciel diventa degno.
 （そして第二の王国についてうたおう、
 そこで人の魂が清められて、
 天に昇るのにふさわしくなるのだ）

中世社会が成熟するとともに、都市の住民構成も複雑になって、貴族・僧侶たちとその使用人という二項以外にさまざまなブルジョワ（ル・ゴフはブルジョワジーという階級名は避ける）が生まれ、善と悪、天国と地獄という、レヴィ＝ストロースのいう二項対立では捉えられない第三項の存在が意識され、また必要にもなってくる。その中で死後の第三の空間の煉獄が生まれたのである。その時期が1170年から1180年のあいだであるというのはまことに興味深い。というのも、去年（2024）、京都では浄土宗開宗850年をうたうポスターが各所に貼られ、記念法要が行われていた。仏教宗派では数え年で年数を数えるから、法然上人が入山以来の永いあいだ真摯に学問と修行に取り組んだ比叡山の黒谷から京都の市井に下り、蓄積した天台の学識も戒律も放り棄てて、高々と専修念仏をととなえ、人びとに奨励するようになって850年だというのである。つまり、法然が専修念仏を宣言したのが1175年のことであり、西洋で煉獄が誕生したのとほぼ同時期になることになる。ここではその意味合いについては掘り下げまい。ただ、西洋では地獄に墮ちるべき人は墮ちるべきで、グレイゾーンの人が煉獄で浄罪の猶予が与えられことになるわけだが、日本では悪

人でも（たとえ親殺しの極悪人でさえも）、「南無阿弥陀仏」とさえとなえれば極楽往生できるようになる。

煉獄が誕生したことによって、これまで地獄の業火に焼かれ続けられるしかなかった罪深い高利貸しに対する救済の道が開けたことに、ジャック・ル・ゴフは焦点を当てる。第2回ラテラノ会議（1139）、第3回ラテラノ会議（1179）、第4回ラテラノ会議（1215）、第2回リヨン会議（1274）、さらにはヴィエンナ会議（1311）においても、厳しく高利貸しが断罪され、キリスト教社会ではアンチ高利貸しキャンペーンが繰り返されてきた。ダンテの『神曲』においてもいまだ地獄篇第十七歌で、悲嘆にくれて涙を流し、手をあちこちに動かしながら火の粉や焦土を払いのけ、それぞれの家の紋様をつけた財布を首からぶら下げている無様な高利貸したちの姿が描かれている。黄色い地に青い獅子の頭とその動きを紋にした財布（ジャンフィリアッツィ家）、血のように赤い地にバターよりも白い一羽の鷺鳥の紋様の財布（オブリアーキ家）、白い地に孕んだ青い色の雌豚の模様の付いた財布（スクロヴェーニ家）、それぞれが悪名の高い高利貸しの家だったということになるが、さらには三つのくちばしの模様の付いた財布をぶら下げた騎士（ジョヴァンニ・ブイアモンテ）ももうすぐここにやって来るはずなのだという。フィレンツェ随一の高利貸しであつたらしい。いずれにしろ、ヴィエンナ会議のころに書かれた『神曲』では高利貸しはまだ地獄の業火に焼かれ続けている。いいそえれば、ダンテ自身の父親も高利貸しを営んでいたらしいのだが。

ジャック・ル・ゴフはシトー会士のハイステルバッハのカエザリウスの『奇跡に関する対話』の中の逸話を紹介している（前掲書、pp.407～408）。

修道士一さきごろ、リエージュのひとりの高利貸が死んだが、司教は彼を墓地に埋葬することを拒んだ。彼の妻はローマ教皇座に赴き、夫を聖地に埋葬させてくれるよう嘆願したが、教皇は拒否した。その妻は夫を弁護して、「殿下、夫と妻は一体をなすと申します。また、使徒パウロは、不信心な夫も信心深い妻によって救われるとっています。私の夫がし忘れたことを、夫の肉体の一部であるこの私が、夫にかわって喜んで致しましょう。夫のために私は隠者の生活を送り、夫の罪を神から贖いたいと思います」といった。枢機卿たちも請願したので、それに屈して、教皇は夫を墓地に移した。妻は夫の墓近くに庵を結び、隠者として蟄居して、昼夜の別なく、夫の魂の救済のために、施し、断食、祈り、徹夜の行によって神の怒りを静めようと務めた。七年後、夫が黒衣をまとって彼女に現れ、「神がそなたに報われんことを。お前の試練のお陰で、私は地獄の底から引き上げられ、この上なく恐ろしい刑罰も免れた。もしお前が更に七年、私のためにこのような勤めを続けてくれるなら、私は完全に解放されるだろう」と礼をいった。彼女はそのさらなる勤めを果たした。七年後、夫が再び彼女に現れたが、今度は白い布を着て、幸せそうに見え、「ありがたいことだ。神とお前のおかげで、私は今日解放されたのだ」といった。

修練士——一体どうして、いかなる贖罪もあり得ない地獄から、今日解放されたなどと言うことができるのでしょうか。

修道士——地獄の底とういうのは煉獄の厳しさを言うのである。同様に教会が故人のために「栄光の王、主イエス・キリストよ、地獄の手から、深淵の底から、すべての信心深い者の魂を救いたまえ…等」と祈るのは、地獄におちた人のためではなく、救うことのできる者のために祈っているのである。地獄の手、深淵の底とは、ここでは煉獄の厳しさを意味している。この高利貸しの場合も、もし彼が臨終の痛悔の祈りをしなかったとしたら、彼は罰から解放されることはなかったであろう。

高利貸しという罪深い生業でこの世を過ごした夫は死後、妻の請願にもかかわらず、聖地に埋葬されることを教皇から拒まれる。枢機卿からのとりなしによって、妻の贖いを条件に、夫の埋葬が許可される。妻は墓の近くに庵を作り、夫のために喜捨、断食、祈り、徹夜の行を行い続ける、そうして七年、夫の亡霊が黒衣をまとって現れ、「地獄の底から引き上げられ、この上なく恐ろしい刑罰も免れた」という。そしてさらに七年、妻が同じような勤めを続けてくれるなら、自分は完全に解放されるだろうといい、妻は勤めを続け、実際に七年後、夫の亡霊がふたたび今度は白い衣を着て現れ、やっと解放されたことを告げる。いったいどういう経過をたどって解放されたというのかわかりにくいのだが、後の修練士と修道士の会話によって、夫の亡霊が「地獄の底」といったのは「煉獄の厳しさ」をいうのであり、妻の七年の勤めによってそこから引き上げられ、さらにまた妻の七年の勤めによって天国に引き上げられたというのである。いずれにしろ、死者は浄罪の火に焼かれ続ける以外に何かができるわけではない。夫婦は一体だから、生者である妻の勤めによって夫の罪は贖われることになる。

ここで高利貸しの罪が贖われるのはその妻の勤めによってであるが、その勤めの中で最も重要なのは喜捨なのであろう。文字通り金銭で「あがなう」ので、教会に対して金銭を寄付しなくてはならない。高利貸しがその罪を犯したのが生前の金銭への過度の執着によってであるとすれば、その罪を贖うためには多額の金銭を教会に寄付すればいいということになる。教会も得をし、今は死者である高利貸しも得をするのだから、高利貸しはその業務に今までに輪をかけていそむことができるようになる。マックス・ウェーバーはその『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』において、北ヨーロッパおよびアメリカの新教の



写真1 〈ラヴェンナのダンテの墓〉

国々での資本主義の発展を支えたのは新教が育んだ人々のエートスであることを説いたが、ジャック・ル・ゴフは『煉獄の誕生』とは別に、他の経済・歴史学の研究者の共同著書である『近代金融業の黎明』（“The dawn of modern banking”）に「高利貸しと煉獄」（‘The Usurer and Purgatory’）という論文を寄せていて、「高利貸し」という商人のもつ「悪魔的なアルター・エゴ（satanic alter ego）」が煉獄の誕生によって救済される道筋ができたことにより、カトリック国の社会においても資本主義の誕生と発展をうながしたのだときわめて挑発的な見解を明らかにしている。

水間寺の方に

行基の四十九院に比定されることはなくとも、さすがに行基の地元であるだけに、和泉地方には行基が開基したと伝える数多くの寺々がある。『大阪府全志』で数えただけでも、ざっと三十二ほどあったが、その中でいま特に気にかかるのが水間寺であり、またその界限である。四十九院の内に数えられ、行基の生家を寺にした家原寺、そして実に巨大な土木事業を成し遂げた久米田池の池畔にある久米田寺より先に、まず水間寺を訪れてみたい。『和泉名所図会』は次のようにいう。

「龍谷山水間寺 水間村にあり。水間川の水源は二流あり。一つは、大川村の東より出て大川といふ。一は、蕎麦原村より出て蕎麦原川といふ。俱に水間に至り、相合ふて水間川といふ。二流の中間にあれば、水間寺といふ。

本尊正観音 赤梅檀。長、四寸。天竺文殊菩薩の作。むかし、天平十六年、聖武天皇、霊夢を感じ給ひ、行基に当山を見せしめ給ふに、滝の本より龍神顕れ、忽、老翁と化し語って曰、ここに、天竺霊鷲山の霊仏文殊の作り給ふ観世音の尊像あり。これを帝に上り、仏閣を営給は、国家長久ならんと告る。行基、即、此よし



写真2 〈水間寺 行基堂〉

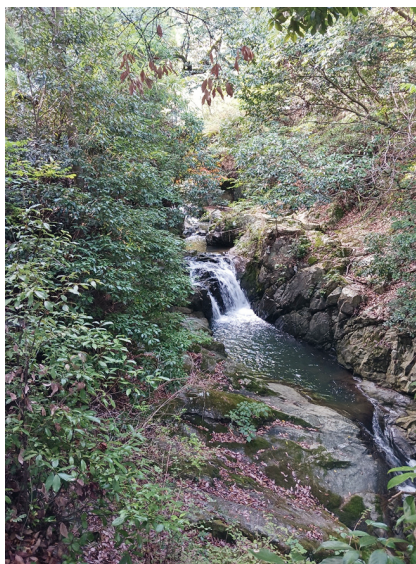


写真3 〈水間寺 観音菩薩が出現したという滝〉

を奏し、霊場を建営し給ふ。毎歳二月初午の日を法会とし、群参す。」

南海本線の貝塚駅で水間鉄道に乗り換える。水間鉄道はただ水間寺参詣のために敷かれたというのだが、全線が開通したのが1926年だということから、今から100年前のことになる。願泉寺（これも行基と無関係とはいえない）の寺内町から発展した貝塚の中心地から市街地も伸びて沿線はすでに農村の風光をうしなっている。いくつかの駅に停まり、二十分もして、山間部への入り口にあたるところに、終点の水間観音駅がある。そこからしばらく歩くことになるが、勢いのいい西鶴の文章を借りることにしよう。日本の近代資本主義の勃興を語るといい『日本永代蔵』の巻一の冒頭、つまり初っ端の「初午は乗てくる仕合せ」は水間寺を舞台にして、初午の日の法会にわざわざ江戸からやって来た人物への寺の高利貸しを話題としている。

「折ふしは春の山、二月初午の日、泉州に立せ給ふ水間寺の観音に、貴賤男女参詣ける。皆信心にはあらず、欲の道づれ。はるかなる苔路、姫萩・萩の焼原を踏分、いまだ花もなき片里に来て、此仏に祈誓かけしは、其分際程に富るを願へり。此御本尊の身にしても、独りひとりに返言し給ふもつきず。「今此娑婆に酈どりはなし。我頼むまでもなく、土民は汝にそなはる。夫は田捶て、婦は機織て、朝暮其いとなみすべし。一切の人、此ごとく」と、戸帳ごしにあらたなる御告なれ共、諸人の耳に入ざる事の浅まし」

現在では三月になるが、旧暦の二月初午に当たる日、そして前後の日を含めて三日のあいだ、水間寺界限は厄除けの法要が行われ、大勢の人びとの参詣でにぎわう。南海電車の難波駅からすでにそれらしい善男善女の姿を見かけ、いつもはゆったりと座ることのできる水間鉄道も、立って吊革を握って揺られなくてはならない。現代のわたくしたちは電車に揺られ、あるいはいつもより渋滞する車で行くことになるが、昔の人は苔路、姫萩・萩の焼原を踏み分けてのことだったのだろう。行路は苦渋すれば苦渋するほど御利益も大きい。しかし、なぜ焼原だったのだろうか。奈良の三笠の山の山焼きを思い浮かべるが、「蕎麦原川」という川の名が示すように上流には「蕎麦原」という地名がある。山間では稲作ではなく、焼き畑で蕎麦が栽培されていたのだと思われる。「いまだ花もなき片里」と西鶴は書いている。山里ではまだ桜の花は咲かない。

「厄除け」の法要で、人びとが厄として払いのけたいのは貧しさでもある。たとえ観音さまがこの世に金銀のつかみ取りなどない、男は田を耕し、女は機を織って、明け暮れ励むがよいとお諭しになったところで、人びとはそれぞれの分際に応じて富を得ることを願ってやむことがなく、また一時的な間に合わせにでも借金に頼ろうとする。

「それ世の中に、借銀の利息程おそろしき物はなし。此御寺にて、万人かり銭する事あり。当年壹銭あづかりて、来年弐銭にして返し、百文請取、二百文にて相済しぬ。是観音

の銭なれば、いづれも失墜なく、返納したてまつる。をのをの五銭、三銭、十銭より内をかりけるに、爰に年のころ廿三四の男、産付ふとくたくましく、風俗律義に、あたまつき跡あがりに、信長時代の仕立着物、袖下せはしく、裾まはり短く、うへした共に、紬のふとりを無紋の花色染にして、同じ切の半襟をかけて、上田嶋の羽織に、櫛うらをつけて、中脇指に柄袋をはめて、世間かまはず尻からげして、爰に参りし印の、山椿の枝に野老入し髭籠取そへて、下向と見えしが、御宝前に立寄で、「借錢一貫」と云けるに、寺役の法師、貫ざしながら相渡して、其国・其名をたづねもやらず、彼男行がたしれずとなりき

「それ世の中に、借銀の利息程おそろしき物はなし」というのは、西鶴の文章の中にしばしば散りばめられる気の利いたアフォリズムだといってよい。西鶴は金を借りることの恐ろしさを知っていたのだろう。しかし、借りるときは返すときの苦勞を考えないのが人間の愚かな習性なのかもしれない。水間寺では金貸しをしていた。利息は一銭借りて、翌年には二銭、倍を返さなくてはならないのだから、やはり高利だといっていい。しかし、観音と結縁してその御利生を得ようがための借錢でもあるから、satanicではなく angelicなもの人びとは意識して、観音様を裏切るようなまねはけっしてすることなく、一年後には必ず「失墜なく」、倍にして返済する。しかも、人びとが借りるのはそれほど多くの金ではなく、せいぜい「五銭、三銭、十銭」である。そこに、「信長時代の仕立て着物」以下、その服装は想像しにくいのだが、江戸の人であるとしたら、上方よりも質実で、眼を引くものの、華美ではなく、丈夫な布地でできていて、むしろ実用的で、世間体を気にしないものであったらしく、しかも「尻からげ」た男が、土産として買った山椿の枝を添えた髭籠に入った野老を手に提げて、仏の前にやって来た。ちなみに、『和泉名勝図絵』に、

めいぼくのつばき
名木椿 水間の椿は、木立優にして色麗し。むかしより世に名高し。

水間の滝を見て
一輪は滝へ飛入椿かな

とある、水間寺の滝は行基の眼の前に観音の出現されたところ、椿は観音さまを回向すべく早春の境内に咲き匂う。

そして、男はいきなり一貫の銭の借用を願い出たのである。寺役の僧は意表を突かれたのか、名前も住所も聞かずに、緡に通された一貫の金をそのまま男に渡してしまった。

『日本永代蔵』の先を続けよう。

「寺僧あつまりて、「当山開闢より此かた、終に一貫の銭かしたる例なし。借人ははじめなり。此銭濟べき事共思はれず。自今は、大分にかす事無用」とさたし侍る。其人の住所は、武蔵江戸にして小網町のすゑに、浦人の着し舟問屋して、次第に家栄へしをよるこびて、掛硯に「仕合丸」と書付、水間寺の銭を入置、獵師の出船に、子細を語りて、百文づゝ

かしけるに、かりし人自然の福有けると、遠浦に聞伝へて、せんぐりに毎年集りて、一年一倍の算用につもり、十三年目になりて、元一貫のぜに八千百九拾貳貫にかさみ、東海道を通し馬につけ送りて、御寺につみかさねければ、僧中横手打て、そのちせんぎあつて、「すゑの世のかたり句になすべし」と、都よりあまたの番匠をまねきて、宝塔を建立、有難き御利生なり。此商人、内蔵には常燈のひかり、其名は網屋とて武蔵にかくれなし。惣じて、親のゆづりをうけず、其身才覚にしてかせぎ出し、銀五百貫目よりして、是を分限といへり。千貫目のうへを、長者とは云なり。此銀の息よりは、幾千万歳楽と祝へり」

水間寺ではこれまで多額の金が貸し出されたことはなく、それが「済べき事共」思われない。柳田国男は『毎日のことば』で、謝罪のことばであり、あるいはもともとは感謝のことばでもあるとして「すみ（い）ません」のことばの由来を説くが、「済む」「済まない」は相手との物質的でもあり、またそれにとまなう精神的でもある貸し借りの関係で、心のわだかまりが無くなるか残るかを意味し、心、あるいはその場の空気が「澄む」「澄まない」でもあることになる。水間寺では一貫の金はとうてい「済まされない」ことと皆が思い、今後は多額を貸すことは禁じられた。一方、一貫を借りたその人物は江戸の小網町に住んで船問屋をしていて、漁師（原文は当然当て字）たちに水間寺で借りた金をまた貸しする。百文では落語の「とき蕎麦」を信じれば、十六文の蕎麦が六杯食べられるだけである、漁師たちにとって十分な設備投資ができる金額ではないと思われるが、「子細を語りて」というから、漁師たちは水間寺の観音様からの御利益あらたかであることを信じて借りるのであり、じっさいに「自然の福」があつて豊漁を重ねることができ、また新たに勃興した都市として江戸は活況を呈して消費活動も盛んだったのであろう。翌年には二倍、翌々年には四倍、さらに八倍、十六倍になっていって、当初の一貫が十三年後には八千九百十二貫になった。東海道を通しの馬に積んで、水間寺とのあいだで「済まされた」のである。水間寺ではこの慶事を記念して塔を建てた。豊臣秀吉の根来入りの際の兵火で古い塔が焼かれ、万治三年（1660）に再建された塔がこれに当たるのだという（現在の塔はさらに新しいものである）。

ところで、なぜ江戸の小網町で船問屋をしている男が和泉くんだりの水間寺まで足を運んで参詣したのか、そしてなぜ江戸の漁師たちが水間寺の観音様のお金を有難がって借りたのか。大阪の淀川河口の田蓑島の漁師たちが江戸の佃島に移住したのに関わりがあるのではなかろうか。江戸の漁



写真4 〈水間寺三重塔の写真〉

師というのは佃島の漁師たちに違いない。現在の隅田川の流域は護岸工事や埋め立てで変化しているとはいえ、日本橋小網町は佃島とは対岸の指呼の間と言っているいい位置にあって、小網町で船問屋をしている男というのも田蓑島にルーツをもっていたのではあるまいか。だから和泉の山間部にある水間の観音様に参詣したのだと推測される。

いずれにしろ、キリスト教が高利貸しを禁じていたのと違い、仏教では「高利貸し」は地獄に墮ちるべき所業ではない。というより、仏教寺院そのものが高利貸しを行っていたのである。

平泉澄の『中世に於ける社寺と社会の関係』（1）

皇国史観の代表的な歴史学者であり、またアジテーターでもあったが、戦後は公職追放になる前に潔くみずから東京帝国大学を辞して、故郷の福井の平泉寺で四十年を過ごした平泉澄に対する個人的な回想を許してもらいたい。

1980年代の末、私は白山信仰について興味を抱き、三方の三つの登山口にある岐阜県の長滝神社、石川県の白山比咩神社、そして福井県の平泉寺を訪ね、また白山にも登ったことがある（これら三つは神仏習合時代には仏寺でもあり神社でもある）。平泉澄は1985年までは存命だったから、死後、それほど時間が経っていたわけではなかった。刀剣を振り回してまで皇国史観を主導し、戦前のマスコミの寵児であった人が四十年ものあいだ故郷でひっそりと過ごしていたのだと、その心中を一種の同情をもって想像していたのだが、しかし、平泉寺を訪れて、そうした思い込みは見事に覆された。平泉寺自体が堂々たる大寺であり、戦国時代は多くの僧兵たちを擁し、大名たちに伍した一大勢力だったのである。大名家はすべて潰れてしまったけれど、平泉寺は森閑とした森の中に中世以来の威容をそのままに保っていた。平泉澄の息子の渉は参議院議員にまでなっていて、福井の名族として存続し、東大を辞めたからといって生活に困るわけでもなく、それにけっしてひっそりと余生を過ごしていたわけでもなかった。

1997年4月から、私は一年間のフランス研修生活を送った。そのとき、京都在住の年配の婦人がパリに来られ、パリの街を歩き回って案内したことがある。その婦人がぜひ訪ねなくてはならない人がいるとおっしゃり、探し出して行ったのがレンヌ通りから少し入った養老院だった。パリの市街地にあるにもかかわらず、老人たちには外を散策する必要もない広々とした庭園もあり、緑に囲まれたごくごく閑静な場所だった。そこに東京大学でフランス語を教えられていたフランス人教師の方が晩年を過ごしておられ、話をすると、辰野（隆）さんとか、鈴木（信太郎）さんとか、過去の著名なフランス文学者の名を呼びながら、懐かしそうに昔話をされた。そのとき、平泉さんという名前も聞いた。皇国史観の唾棄すべき、あるいは敬遠すべき存在という感じではなく、どこか親愛なる存在というニュアンスがあった。同じ職場の同僚として当然だったのかもしれない。婦人とその老フランス人教師（もともとはスペイン貴族の血が流れているとおっしゃっていたが）との関

係については、よくわからなかったのだが、その会話は興味深いものだった。その翌年、私は京都で、その婦人から、南禅寺でのひとり暮らしをやめて、滋賀の方の娘のところにも身を寄せることになったので、本を処分したいといわれ、そのお手伝いをした。そのとき、平泉澄の著書十数冊と、彼が主宰して刊行を続けていた『桃李』や『日本』のバックナンバーをごっそりと譲り受けたのである。段ボール箱で二箱分もあったろうか。平泉澄自身からその婦人に送り続けられていたものらしいのだが、その婦人と平泉の関係についても、私はあえて尋ねることもしなかったので、よくはわからない。

平泉澄の『中世に於ける社寺と社会の関係』は、老婦人に譲っていただいた十数冊の中の一冊なのだが、自身が中世以来の大寺の住持である誇りと実感、あるいは体感とっていいものから生まれたものだといっている。しかし、主観にかたよらず、史書を博搜し、ヨーロッパの歴史学にも目を配って、広い世界史の中で論じられている。十数冊の中のほとんどは『菊池勤王党』とか、『建武新政の本義』とか、『闇斎先生と日本精神』とか、やはり国粋主義を鼓吹して客観性を失っている観を否めないが、『中世における社寺と社会の関係』は中世社会において社寺勢力が物質的にまた精神的に果たした役割を考える上では今なお光彩を失うことのない名著であるといわざるをえない。それが実は大学の卒業論文をもとにしたものだということから、驚くほかはない。

この本の構成はまず「第一章 時代の区画」から始まり、「中世」という時代の政治史と文化史における異同を述べ、その発端と終結を論じる。「第二章 社寺勢力の根底」では中世の社寺の数、そして僧侶の数の客観的に把握することを試み、「第三章 社会組織」はおおむねアジール論であり、しかもその嚆矢となる。「第四章 経済生活」において、社寺の経済活動が語られる。社寺に市が立ち、社寺が金融業を営む、その意味について深く掘り下げる。「第五章 精神生活」は、仏教の形而上の議論ではなく、寺院がになった教育および学問について論じる。そして最後に「第六章 社寺の没落」。

「第三章 社会組織」と「第四章 経済生活」はいまなお精彩を放って教えられるところが実に多い。第三章では、まず西洋のアジール論を紹介し、西洋古代のアジール、西洋中世のアジールと論じ、西洋近世のアジール廃絶を述べる。

ところで、最近、私は作品の中にいわゆる差別語が頻出することを再確認してそれをどう扱うべきか参考にする意図があって（障害者が同一生活圏に交じり合って存在するのが中世である）、ヴィクトル・ユーゴーの『ノートルダム・ド・パリ』を読んでいたのだが、今や広場で処刑されようとしていたエスメラルダ（差別語で形容されている）を救おうと、カシモド（同じく差別語で形容されている）はノートルダムの回廊の欄干を綱手に滑り降りて来て、エスメラルダを片手で引っさらって「アジール (Asile)」と大声で叫びながら、ノートルダムの中に電光石火のうちに戻って行く。ノートルダムは官憲の手の及ばないアジールだったのである。処刑を見物しようと集まっていた一万の人びともまた、「アジール、アジール」と叫んで、エキゾチックな美しい女性の処刑を見られなかった落胆を示すよ

りも、喝采の声をあげる。ヴィクトル・ユーゴーの歴史小説は『93年』を始めとしてその舞台となる年代がはっきりしていて、『ノートルダム・ド・パリ』は1482年を舞台にするが、その後、エスメラルダはおびき出されて処刑され、カシモドは失意の中で姿を消す。アジールが残滓として残り、またそのアジールが踏みにじられる1482年はそのまま中世の終わりを示すことになろう。

あるいは、やや後のイタリアのことになるが、当代随一の彫金師であり、すぐれた芸術家でありつつ、まことに血の気の多かったベンヴェヌート・チェリーニの『自伝“Vita”』を読むと、1527年の「ローマの略奪（il Sacco di Roma）」の際、チェリーニ自身、教皇とともにサンタンジェロ城（もともとは皇帝ハドリアヌスの巨大な円墓）に立て籠って戦うのだが、本来、教皇領としてアジールそのものでなくてはならなかったローマ、そしてそこに存在する教会が同じキリスト教徒の兵士たちによって強奪される様子がうかがえる。アウグスティヌスが『神の国』の冒頭で執拗にその意味を議論しているように、千百年前の西暦410年の同じくil Sacco di Romaの際には、少なくとも教会はアジールとして承認されて、アラリック率いる異端の神々を信じる蕃族もけっして侵犯することなく、命からがら駆け込んだ人びとは生き永らえることができたのだったが。

平泉澄は日本の場合を取り上げて、対馬の天道山をアジールだと説くが、古代日本にはアジールの形跡は少ないという。平泉はただ一つ、『日本書紀』において、雄略三年の夏四月の記事を挙げる。阿閉臣国見が、斎宮である栲幡皇女と廬城部連武彦が密通して、皇女は懐妊までしていると讒したので、武彦の父は禍がわが身に及ぶことを恐れて、息子を廬城河のほとりに誘い出して撃ち殺した。天皇が事の真偽を糺すために使者を遣わしたところ、皇女は失踪して自害した。その屍を探し出して腹を割いてみたところ、ただ水の中に石だけがあった。武彦の父はわが子の無実を雪ぐことができたが、みずから子を殺したことを悔いて、誣告した国見を殺そうとしたので、国見は石上神宮に逃げ隠れたというのである。これにもう一つ付け加えれば、同じく『日本書紀』の仁徳天皇四十年春二月の記事、仁徳天皇は異母妹の雌鳥皇女を妃としようとして同じく異母弟の隼別皇子を仲立ちに遣わしたものの、雌鳥と隼別は密通してしまい、それを怒った仁徳は隼別を殺そうとする。隼別と雌鳥は手に手を取って逃げ、伊勢神宮に駆け込もうとする話があって、伊勢神宮もアジールだったと考えられる。

平泉は、中世に入って後、寺辺での殺生は厳重に禁断されるようになったといい、讃岐の善通寺や伊予の興隆寺の文書を引いて、守護・地頭・御家人らが寺域に乱入して禽獣を狩猟するのが禁じられたと述べる。禽獣の殺生、狩猟が禁止されたわけだが、それが聖域を血で汚すことを忌むことから来ている以上、人間の血を嫌うのは当然といわなくてはならない。この思想が武家政府の成立とともに、多くの社寺に認められた守護不入の特権と結びついて、社寺を暴力による侵犯と警吏の検断の埒外に置くことになった。承久の変に敗れた宮方の人びとが梅尾に逃げて高山寺に隠れたとき、当然に鎌倉方は宮方の人びとを

探索し、処分しようとする。それに対して、明恵上人は北条泰時に次のようにいったとされる。

「此山ハ三宝ノ寄進タルニ依テ、殺生禁断之地也、依鷹ニ追ル、鳥、獵ニニグル獸マデ、皆爰ニ隠レテ命ヲ続クノミ也、サレバ敵ヲ通ル、軍士ノ通レ難クシテ、命ヲ計リ助カリテ、木ノ陰、岩ノハザマニ、隠レ居テ候ハンズルヲハ、我身ノトガメニ預リテ、難ニ逢候ハンズレバトテ、無情追出テ敵ノ為ニカラメトラレ、命ヲ奪ハレ候ハン事ヲ、カエリ見ヌ事ヤハ候ベキ、我本師能仁ノ古ヘハ、鳩ニカハリテ全身ヲ鷹ノ餌ト成サレ、亦餓タル虎ニ身ヲタビ候シゾカシ、其マデノ大慈悲コソ及候ハズトモ、角ク計ノ事ノヤワカ無ク候ベキ、若シ隠ス事ナラバ、袖ノ下、袈裟ノ浦ニモ隠シトラセバヤトコソ存候シカ、尚後モ向後モ仕ルベク候、是為政道ノ難儀ナル事ニ候ハバ、即時ニ愚僧ガ頭ヘヲハネラレ申ベシ」(『中世に於ける社寺と社会との関係』至文堂 1941 第六版 117～118 ページ)

この梅尾は殺生禁断の地であり、鷹に追われた鳥、獵師に追われた獣もここでは生き延びさせる。まして敵から逃れてきた兵士を、面倒だからといって、差し出すことをあえてしようか、釈迦はみずから鳩に代わって鷹の餌食になり、飢えた虎のためにわが身を投じなされた。それほどの大慈悲は持ち合わせていなくても、どうしてそうした精神をもたないでいようか。それで、あなたの政道がたちゆかないようなら、今すぐ私の首を刎ねなさい・・・覚悟の定まった毅然としたことばが持戒も随一であった高僧から発せられる。泰時は畏怖をおぼえ、明恵には帰依する心まで抱いたようである。明恵のことばは中世日本のアジールの精神を宣言したものとってよい。

もう一つ、京都の西八条にある大通寺のアジールの由来について平泉澄は述べる。大通寺は源実朝が鶴岡八幡宮で暗殺された後、その妻の坊城氏が出家して京都に戻って自邸を寺としたものだが、その本覚尼(通称八条尼)の置文が残っている。

「承久大乱の後、京中の守護をかれし時、ことにこの御所を警固せよとて、紀州ゆあさの御家人におほせつけられてよりのち、としすでにふりぬ。寺門かたぶく事なくは、守護の武士もあらたまる事なかるべし。右府將軍御影おはしませば、武家いかでかたやすくおもひたてまつらるべき」(同 119 ページ)

明恵上人の母の出自が紀州の湯浅氏であったことが多少気になるが、大通寺は夫の故將軍の菩提を弔うための寺であるから、あだやおろそかにすることのできる寺ではないとし、またその領である六の宮八町についても置文をのこしている。

「一 六の宮八町事

御領八町うちには、むかしよりいまにいたるまで子細他所にことなり、たとい重過の物なりといへども、このうちに入ぬれば他人らうぜきをいたす事なし。末代に至るとも寺門このよしを存知すべし」(同 119 ページ)

たとえ他所で重い罪を犯したとしても、この御領八町の中にさえ入り込んでしまえば、他者が「狼藉」を働くことはできないとする、高々としたアジールの宣言が、不幸に見舞

われて仏の道に入った未亡人によってなされている。明恵上人にしる、本覚尼にしる、カリスマとしての権威があってこそ俗世間に対して、断固として聖域を主張することができたのであろうが、中世社会において多くの社寺がアジールの特権を獲得していく。平泉はその例をいくつも挙げるが、しかし、中世後期、強力な戦国大名らによって、そのアジールが禁じられ、またその権利が奪われて行く経緯についても述べている。豊臣秀吉の甥である秀次は関白の位を継ぎながら、秀吉の不興を買って高野山に入る。

「十日の暁方高野山にへ登山あり、青巖寺へ入て閉居あられ候付、古来より殺生禁断の高野の儀に候得ば、自命におゐては異も有之間敷と諸人積の外、同十五日に至り、秀吉公の命として羽柴左衛門大夫・福原左馬助・池田伊予守三人登山して興山上人に逢て其旨を述、秀次終に自殺有（干時二十八歳）・・・是より已後、高野山遁科屋の法式は破れ候と也」（同135ページ）

高野山には「遁科屋の法式」があって、俗世間でいかなる罪を犯していても、逃亡してくれば、その科を遁れて身命の安全が保障される建物があった。年老いて狂気に陥っていた伯父の秀吉の手から何とか逃れて高野山に登ったものの、興山上人は権力者の前にその法式を守りとおせることができなかつたということになる。近世の初めに寺院のアジールの特権はことごとく俗世の権力によって廃絶させられるが、「駆け込み寺」としてアジールの変種として長く残った鎌倉の東慶寺、上野の国の満徳寺の由緒についても、平泉は詳しく述べている。

アジールを宣言するということはまず結界を設けるということである。『四分律』は仏教の基本である戒律を説く經典であるが、そこには結界の儀式が説かれている。鎌倉に下つた忍性はしきりに結界を行う。境界を結ばれた中では厳しく戒律が守られなくてはならない。仏教において殺生戒がもっとも重要だとすれば、その境界の中では鳥獸の殺生さえ禁じられなければならない、ましてや人の殺生においてをや、ということになる。俗世界では処刑されるべき人間もその境界に逃げ込んだなら、その血が流されてはならず、生命は守られなくてはならない。

平泉澄の『中世に於ける社寺と社会との関係』（2）

中世の社寺のアジールに象徴される聖域としての在り方が、そこでの自由な商業活動をも許したのだらうと推測される。また人びとが参詣するのを目当てに市が立つ。社寺みずからが市を経営して利益を得ることもある。京都では今でも毎月21日には東寺で「弘法さん」があり、25日には北野天満宮で「天神さん」が開かれ、店屋台がびっしりと並んで人びとでにぎわう。そこで売られているものの多くは骨董品が多いが、「所場」代はもちろん東寺と天満宮にははられなくてはならない。「市」は「いちはやし」の「いち」であり、そこから「いちこ（巫女）」も派生し、「いつ（稜威）」とかかわって、霊性を帯びたことばである。「いとし（愛）」、「いたし（甚・痛）」、「いつく（斎）」、さらには親族の「いとこ」なども同じワー

ド・ファミリーを構成することばであり、「座頭市」の「市」にもその名残があり、信長の妹の「お市の方」という名前もただバザールやマーケットから来る名前ではないはずである。記紀の古代に「糸媛」などという名が出て来るのも、ただ裁縫する糸を意味するのではなく、巫女性をもった女性だったと考えた方がいい。大阪の船場で長女を「いとさん」、次女を「こい(と)さん」といったのにもかすかにその名残がある。柳田国男の『妹の力』をもちだすまでもなく、一家の中で霊的な力をもつ妹（この呼称は長姉であってよく、むしろ多くはそうである）がいる。以上は私の説というより、学生時代の阪倉篤義先生の国語学の授業から導かれたものである。

いずれにしろ、商行為は公正でなくてはならないから、神聖な場所で行われなくてはならず、また霊的な摩訶不思議な力をもった貨幣によって決済されなくてはならないことになる。蛇足かもしれないが、フロイドは、フロイドなりの論理で、黄金色の貨幣は人糞であるといい、エリアーデ、そして柳田国男は貝、すなわち女性器なのだという。じっさい、江戸時代の鯰絵には、男が肛門から黄金色の小判をざくざくと排泄している絵があってフロイドの説を傍証するようであり、また貨幣といい、財といい、寶といい、文字の中に「貝」を含み、日本ではいまだに存在する5円および50円の穴の開いた硬貨にエリアーデの説をあながち否定できないその名残が歴然としてある。

平泉澄は小田原の松原神社、京都嵯峨野の清凉寺、奈良の法隆寺、摂津広田社、駿河の安養寺、京都の阿弥陀寺、美濃の円徳寺などなど、様々な文献から社寺に存在した市を指摘するが、自身が住持する平泉寺の寺域の内に、安ケ市、鬼ケ市、徳市などの字の名が残っていて、また周辺にも坊ケ市、北市などの地名があることから、平泉寺の境内またはその周囲がかつてその地方の商業の中心であったことを指摘している。

そして、ル・ゴフのいう商人の alter ego である高利貸しを日本では社寺自身が行っていたことを、平泉澄は述べる。

仏寺は金融を行っていた。それは古く中国においてすでにそうであったようだが、日本でも早くも『日本霊異記』に、寺院あるいは僧侶の行っていた高利貸しについての言及が何か所かにある。たとえば、中巻の第二十四に、

「^な檜^い磐^い嶋^はは、^{なら}諾^す樂^みの左京の六条五坊の人なり。大安寺の西里に居住む。聖武天皇の^{みよ}世に、其の大安寺の^{しゆたらぶん}修多羅分の錢三十貫を借りて、^{こしのみちのくち}越^{つるがのつ}前の都魯鹿津に往きて^{あきな}交易^こひ、^も之れを以ちて運び超えむとして船に載せ、^{かへ}家に來らむとする時に、^{たちまち}忽然に病を得たり」

という。この病にかかった檜磐嶋を地獄に連行するために閻魔大王の使いがやって来るが、牛の肉を賄賂として食べさせて、連行を免れるという、高利貸しと贈賄の横行という現代でも通用するテーマが語られる説話であるが、大安寺では経論を転読、講説する僧侶（修多羅衆）の費用を敦賀の港を拠点とする交易者に貸し付けて、高利を得ていたのである。ヴェニス¹の商人の所業そのものを大安寺は行っていたことになる。

大安寺の貸付けについては『日本霊異記』の他の箇所でも語られるが、それとは別に、

またたとえば、下の第四の話は次のように始まる。

「諾楽京（ならのみやこ）に一（ひとり）の大僧有（あり）。名詳（つばひらか）ならず。僧常（つね）に方広（ほうくわう）經典（きんげん）を誦（よ）み、俗（ただひと）に即（つ）きて錢（ぜに）を貸（か）して妻子（めこ）を畜養（やしな）ふ。一（ひとり）の女子（むすめ）嫁（よめ）ぎて、別（わか）れて夫（をひと）の家に住（す）む。帝姫（ていき）阿陪（あべ）天皇（みよ）の代（よ）の時に、婿（むこ）は奥国（おくくに）の掾（せんの）に任（ま）けられ、すなはち舅（しゅう）の僧（しゅう）に錢（ぜに）二十貫（じゅうに）を貸（か）りて装（つ）して任（ま）けらるる国（くに）に向（むか）く。歳（とし）余（あま）を歴（か）て貸（か）れる錢（ぜに）一倍（い）となり、僅（ただ）に本（ほん）の錢（ぜに）を償（か）ひていまだ利（り）の錢（ぜに）を償（か）はず。いよいよ年月（げんげつ）を逕（た）て、なほ徹（た）り乞（こ）ふ。婿（むこ）竊（せき）に嫌（きら）を懷（いだ）きて、是（こ）の念（ねん）を作（お）さく「便（べん）を求（もと）めて舅（しゅう）を殺（ころ）さむ」とおもふ。舅（しゅう）知らず、なほ平（つね）の心（こころ）をもちて乞（こ）ふ。婿（むこ）舅（しゅう）に語（かた）りて曰（い）はく「共（い）に持（も）て奥（おく）にして償（か）はむ」といふ。舅（しゅう）聞（き）きて往（ゆ）き、船（ふね）に乘（の）りて奥（おく）に度（わた）る。婿（むこ）と船人（ふねびと）と心（こころ）を同（おな）じくし悪（あく）を謀（ま）りて、僧（しゅう）の四（よ）の枝（えだ）を縛（なげ）りて海（うみ）の中（な）に擲（な）る

「大僧」ということばは類例がないようだが、文脈からは大乘の僧ということであろうか。大乘仏教の嚆矢である方広經典、なかんずく『維摩經』を読んで、「俗に即」いて結婚もし、大商人だった維摩よろしく善も悪も超え、道も非道も超えて利殖に励んでいたのであろう。娘がいて、婿を迎えるが、その婿が奥国の掾として赴任するので、その準備のために二十貫を用立てた。「奥」は隱岐だともいうが、やはり「陸奥」なのではないか。東北には海路も開発されていたようだし、蝦夷を防御するための最前線に赴くために、従者の分も含めて、馬や武器その他の準備が必要で、舅から金を借りたのであろう。地方官はもちろん無慘さわまりのない苛斂誅求によるのだろうが、はなはだ実入りがよく、一年で十分の利益を得ることができたのに、しかし、婿は元金だけを返して、利息を払おうとしない。それで、舅の僧はしつこく請求する。婿はそれが嫌になって、舅を自分の任地に誘ってそちらで償おうといい、船上で四肢をしばって海に投げ入れたというのである。舅は方広經のお陰で死を免れはしたものの、金銭の貸し借りのものつれから殺人にまで発展する世相が描かれている。

「出挙」とは、春先に国家が官稲を貸し付け、秋の収穫時になにがしかの利稲とともに回収する制度をいうが、国家とは別に寺社や権門貴族たちも「私出挙」を行って、稲や金銭を貸し付け、五割以上の利子とともに回収するようになる。平泉澄は「中世の寺院は頗る銀行に類似しているといはなければならない」と喝破する。その淵源を上に掲げた『日本靈異記』のいくつかの説話を引用しながら説き、中世における例として、鎌倉の円覚寺、京都の相国寺の万松院、東大寺の法輪院などを掲げるのだが、その代表的で最大のものは比叡山であった。その東麓の坂本の町では琵琶湖の水利も生かして盛んな商活動も行われて繁華な街を形成したし、為替などのシステムも比叡山のネットワークを生かして整備される。比叡山の息のかかった金融業者は京都の町をも支配することになる。中世にしきりに行われた徳政も比叡山の息がかかっていれば、その権威でもって封殺される。

水間寺も天台宗に属するが、その中世の姿は曖昧模糊としている。西鶴が描いたのは江戸時代の姿に過ぎない。中世においても、観音様のご利生としての金融は行われていたと想像されるのだが、それを行基の時代からの事業と考えることはできないのだろうか。

平泉澄は中世の経済活動を支える交通の整備において看過すべからざる事として寺社の果たした役割を二つ挙げる。

「その第一は僧侶が慈善のために道路を修築し、橋梁を架設した事であつて、この事は奈良時代以来先例の多い事であるが、中世に入つても益々盛んであつた。今その著しいものを挙げれば、建治の頃興正菩薩叡尊が宇治木津の大橋を造立した事（興正菩薩伝）、嘉元元年入寂した極楽寺の忍性は一生の間に諸国の河橋を架すること一百八十九箇所に及んだ事（元亨釈書）、貞和五年抖擻の沙門が四条の橋を架けようとして勸進田楽を催した事（太平記卷二十七）などがそれであつて、その外にも四条の橋（大外記師夏記・臥雲日件録・祇園古文書）や、伊勢内宮の大橋や（慶光院古記・河崎氏年代記）、又は勢田の橋（東国紀行）などが、僧侶の勸進によつて造立せられた事が記録に散見してゐる」（前掲書 239 ページ）と、まず一つめを挙げ、さらにもう一つの寺社の役割については、

「又次に注意すべき事は、寺院が旅行者のために自ら旅宿となつたことである」として、寺院の旅館の機能を挙げている。行基が旅行者のために駅路に布施屋をもうけたことはいうまでもない。寺院の宿坊というのは現在でも高野山にあるし、私の中学生のときの京都の修学旅行の宿は聖護院だったのをふと思い出す。

旅宿のことについてはさておき、「勸進」についていえば、平家の手によって焼かれた東大寺の鎌倉時代の再建にかかわった重源の「勸進」は歌舞伎の「勸進帳」にもなつて、あまりに有名であるが、平泉がその活発な慈善活動とそれを支える「勸進」について名前を挙げている興正菩薩叡尊は行基ゆかりの久米田寺と家原寺が衰退していたのを再興するのに尽力した人であり、また忍性は夢に行基を見てみずからの墓も行基の墓のある生駒の竹林寺に定めた、ともに行基を心底から尊崇して、その活動の軌跡を真摯にたどろうとして、鎌倉新仏教の勃興をよそに、奈良の旧仏教の特に戒律の復興を企てた高僧である。叡尊や忍性の土木工事も「勸進」を基礎にしていたことがうかがえる。そして、その維持においても、おそらくは通行料、使用料を徴収して充当していたものと考えられる。叡尊、忍性の勸進、そして重源の勸進も、行基の勸進の先例をたどつたものといえよう。聖武天皇が大仏鑄造の詔を出したのは天平十五年（743）の十月十六日のことであるが、その三日後の十月十九日の『続日本紀』の記事には、

「乙酉、皇帝紫香樂宮おほに御しまして、廬舎那の仏像を造り奉らむが為に始めて寺の地を開きたまふ。是に行基法師、弟子等を率もろもろみて衆諸を勸すすめ誘みちびく」

とある。「衆諸を勸め誘く」というのは、行基が弟子らとともに勸進活動を始めたというのである。行基のその後の大僧正への抜擢もその勸進の能力を評価してのことといふしかない。しかし、二十六年前の養老元年（717）にはそれこそが行基集団の罪状として批判されたのだった。『続日本紀』養老元年四月二十三日、僧尼を統制する詔が出され、行基の徒が指弾される。

「凡そ僧尼は、寺家じやくこに寂居して、教を受け道を伝ふ。令りやうに准よるに云はく、「其れこつじき乞食する

者有らば、三綱連署せよ。^{うまのとき}午より前に鉢を捧げて告げ乞へ。此に因りて更に餘の物乞ふこと得じ」といふ。^{まさ}方に今、小僧行基、^{あは}并せて弟子等、^{がいくりやうでふ}街衢に零置して、^{みだり}妄に罪福を説き、朋党を合せ構へて、^{しひひ}指臂を^は焚き剥ぎ、門を^へ歴て仮説して、強ひて餘の物を乞ひ、^{いつは}詐りて聖道と称して、百姓を妖惑す。道俗擾乱して、四民業を棄つ。進みては釈教に違ひ、退きては法令を犯す」

『五木の子守歌』は「おどまかんじん、かんじん」と哀愁を込めてうたう。九州では物乞いを「勧進」という方言がのこっている。乞食行は仏道修行の基本にあるものだが、この養老元年の詔では、僧尼は寺院に寂居して、街中で乞食を行う場合には、三綱の承認が必要であり、午前中に鉢を捧げて、食物だけを乞うことに限れというのである。しかるに行基の徒らは、寺院に寂居することなく、街に繰り出しては、みだりに罪福を説き、奇怪な妖術を用いながら、家々を訪ねてはいつわりを説き、食べ物以外の物を乞い、人びとをごまかしては、これが真実の仏道だと説きまわっている。道俗ともに混乱し、人びとは生業を棄てるに至る。これでは仏の教えに背くとともに、法令にも違犯することになる。

ここで重要なのは、必要な食べ物をだけ乞食するのが基本であるのに、行基集団はそれ以上のものを乞うていると述べていることである。それが行基の土木工事の基礎となった「勧進」活動なのだといっていることである。それが行基の土木工事の基礎となった「勧進」活動なのだといっていることである。それが行基の土木工事の基礎となった「勧進」活動なのだといっていることである。それが行基の土木工事の基礎となった「勧進」活動なのだといっていることである。それが行基の土木工事の基礎となった「勧進」活動なのだといっていることである。

水間寺のお夏清十郎

ところで、水間寺の境内には愛染明王を安置する愛染堂があって、その横にお夏と清十郎の墓がある。井原西鶴の『好色五人女』および近松門左衛門の『五十年忌歌念仏』などによって人口に膾炙したお夏清十郎の話とはまた別のお夏清十郎の物語がこの水間の里には伝わっていた。愛染堂脇の石碑の説明文を次に掲げる。

「今から七百年前伏見天皇の水間寺供養の時勅使御從役中に山名清十郎と申す美男子のあり水間の楠右エ門の娘お夏も勝れた美女にて給仕をしたる縁にて清十郎と相思の仲となるも身分の上下に隔てられて空しく別れしがお夏は清十郎を忘れ得ず愛染明王に願をかけ玉椿に紙を結びて再会を祈念す偶南北朝に合戦発り清十郎も住吉渡辺橋の戦に先陣して奮戦せしも北畠大納言安名の森にて討死し南軍敗戦すお夏は清十郎を求めて戦場を彷徨い住吉の松原にて巡り会い二人手を取りて水間に販る此事京都新宮御所に聞え水谷又四郎追手に来る清十郎臣山名忠平身代りになりて首を討たる岸和田浄円寺前の首塚これなりお夏と清十郎は睦じく水間の苔下の露と消え遺体は共に玉椿のもとに埋めらる」

伏見天皇は持明院党だから、北朝系統の天皇、その勅使の從者として山名清十郎が水間

寺にやって来て、その給仕に駆り出された水間の里の楠右エ門の娘のお夏と相思相愛の仲になるものの、身分の上下があり、清十郎は都に帰ってしまう。お夏は愛染明王に願をかけていたが、南北朝の争いが勃発して、清十郎は北畠大納言の麾下で戦に出て、敗れてさまよっていたところ、住吉の浜辺で巡り合って水間の里に逃れて一生を連れ添って暮らす。北畠大納言というのは、中納言であった北畠顕家のことと考えていいであろう。若年の二十一歳で戦死したが、戦の天才であった。もちろん、南朝方の英雄であるから、清十郎も南朝方でたたかったことになる。南大阪の山間部は南朝方の本拠地といってよかったから、隠れて住まうのにも好都合だったのであろう。



写真5 〈お夏清十郎の墓の写真〉

西鶴および近松の「お夏清十郎」は万治三年（1660）にあった、播磨の国姫路の米問屋の娘お夏と手代の清十郎の事件をもとに書かれていて、南北朝の時代の話ではない。水間寺のお夏清十郎は伝承過程による一つのヴァリエーションともいいにくい筋立てになっている。ただ、なぜか近松の『五十年忌歌念仏』では清十郎は「湧きて流るる和泉の国、水間の里の佐治衛門畠作の田烏や、鶯が生んだる高給取の手代」と紹介されていて、出自が水間の里となっている。西鶴の『好色五人女』の方では、清十郎の出自は室津であり、『好色一代男』の世之介で当たりを取った影響であろうか、「むかし男をうつし絵にも増り、其さまうるはしく、女の好ぬる風俗、十四の秋より色道に身をなし、此津の遊女八十七人有しを、いずれかあはざるなし」と、鼻持ちならないドン・ファンとして描かれるのだが、ただそれを勘当する父親の酒商人の名は和泉清左衛門となっていて、和泉と無関係とはいえないようである。また、万治三年というのは、江戸の小網町の船問屋の寄進による三重塔が竣工した年でもある。なにか関係がありそうにも思うが、よくわからない。

孝恩寺の仏像群

行基の足跡をたどるためには、水間寺だけではなく、水間寺界隈を考えるべきであるらしい。水間という地名は大川（黍谷川）と蕎麦原川（現在は下流の名である近木川という名称で済ませている）の間にあるから生まれた地名であるが、その蕎麦原川をさかのぼってしばらく行くと、木積の里にたどり着く。『大阪府全志』に、

「旧観音寺の縁起に依れば、村名は僧正行基の畿内に四十九院を建立するに当り、本州木島の杣山より其の用材を伐り出せしとき、本地に其の用材を積み置きしより起れりといふ」（井上正雄著『大阪府全志』巻之五 清文堂 1922 初版発行 1976 復刻 77 ページ）

とある。ふと、行基に大いに影響を受けた忍性が鎌倉の土木工事に着手し、港湾の造成にも取り組んだ、そのあたりが今も材木座という名を残しているのを思い起こすが、木積は座こそ形成されなかったにせよ、行基に指導された集団が柚から切り出した木材の集積地だったということになる。そこにかつてはやはり開基を行基とする観音寺があった。同じく『大阪府全志』には次のようにある。

「観音寺の址は字下出にあり。寺は聖武天皇の勅に依り、僧正行基七堂伽藍を建て、自刻の観音像を安置せし所にして、桓武天皇は寺料千七百石を寄せ給ひ、寺門隆盛を極めたりしが、降て足利氏の時に至り、山名氏・大内氏等の同氏に叛きて紀・泉の間に戦ふに及び、仏堂六宇・僧房二十餘宇は灰燼に帰し、仏像は池中に投げられて幸に災を免れしも、天正十三年豊臣氏の根来寺攻めに際し、復た其の兵火に罹りて僅に観音堂の一字を残せしに、徳川氏に至りて領主岡部氏は往古の由緒を追想し、山林五町・新田二反五畝歩を寄付して永代修繕の料に充てられ、庫裏・鐘樓を建営せしも、安永以来頽破甚だしく、数度の営繕に其の山林田地は悉く売却せられ、嘉永以後益衰微し来りしが、明治二十二年に至りて遂に廃寺となり、堂は大正三年一月孝恩寺に売却せられて、其の境外仏堂となる」(同780～781ページ)

水間寺に勝るとも決し劣ることのない威容を誇る行基開創の七堂伽藍を備えた大寺があって、平安時代初めの桓武天皇の時代には寺料千七百石を寄せられたという。それが室町時代の戦乱によって多くの伽藍が焼かれ、仏像は池の中に投げ込まれて消失を免れた。さらに豊臣秀吉の根来攻めのときに再び罹災し、わずかに観音堂一字だけを残した。江戸時代に入って、岸和田藩主の岡部氏によって修復されたものの衰退を免れず、明治になって廃寺になって、大正時代、観音堂だけが隣接する孝恩寺に売られて残ったということになる。

そして、『大阪府全志』は観音寺に続けて、それを買い受けた孝恩寺について次のように書いている。

「孝恩寺は同所にあり、慈眼山大悲院と号し、浄土宗知恩院末にして阿弥陀仏を本尊とす。創立の年月は詳ならず。元禄七年正月の再建なり。境内は四百九十四坪を有し、本堂・庫裏・門を存す。境外に庫裏・鐘樓・観音堂あり。即ち大正三年一月に合併せられたる前記旧観音寺の遺物なり。其の観音堂は方五間単層屋根四柱造本瓦葺にして、構造精緻を極む。飛驒の番匠の建てしものなりと伝へ、釘無堂と呼ばれて其名世に高く、明治二十三年二月保存資金一百円を下賜せられ、同三十六年四月十五日特別保護建造物となり、大正五年三月より着手せられて大修繕成り、輪奐の美旧に復せり。工費は金九千七十円二十銭なりといふ。堂に安置せる木造の仏像等は、何れも美術工芸上の参考たらざるものなく、持国天立像一軀・勢至菩薩立像一軀・阿弥陀如来座像一軀・阿弥陀如来立像一軀は明治二十四年七月鑑査状を附与せられ、之と同時に鑑査状を附与せられし跋難陀竜王立像一軀・薬師如来立像一軀・聖観音立像一軀・普賢菩薩立像一軀・釈迦如来座像一軀・文殊菩薩立像一軀・

十一面観世音立像二軀・虚空蔵菩薩立像一軀・弥賢（勒の誤りか）菩薩座像一軀・弁財天立像一軀・多聞天立像一軀・帝釈天立像一軀及び板絵着色天部像一面は大正二年四月十四日国宝となる。一堂にして此く多数の逸品を所蔵せるは、蓋し天下に稀ならん。尚孝恩寺本尊阿弥陀如来立像一軀及び脇士の観音・勢至立像二軀も、明治二十四年七月三日鑑査状を附与せらる」（同 781～782ページ）



写真6 〈釘無堂の写真〉

江戸時代、衰退した観音寺にくらべ、徳川氏の庇護もあって、浄土宗の寺々は安穩であったのだろう。その孝恩寺の「境外」に庫裏・鐘楼・観音堂があって、これが前の観音寺から譲り受けたものだと、『大阪府全志』はいう。十一月の孝恩寺の特別拝観の日、庭掃除をしておられた前住職ご夫妻のお話をうかがうことができたのだが、孝恩寺はもともと現在の孝恩寺とは道を隔てた現在の木積町文化会館と地域の地車（だんじり）の倉庫のある場所にあったのだという。それが昭和九年（1934）の室戸台風によって堂舎が崩壊してしまい、今の場所、大正十一年（1922）発行の『大阪府全志』のいう旧観音寺の跡地にすっかり移ってしまったのである。当時の孝恩寺にとって「境外」にあった観音堂は今では阿弥陀如来三尊をまつる孝恩寺の本堂になっているわけだが、俗に釘無堂と呼ばれて、古式の建築のまま残っていて（江戸時代の前孝恩寺のお堂は台風ですっかりだめだったのに、千年前のお堂はびくともせんかった、やはり大したものですよと、前住職はいわれた）、そこに今は新しい宝蔵庫に移された実に二十軀近くの観音寺伝来の仏像が残されていたのである。大正二年にはすべて国宝として認定されたのだというが、それらは行基草創の観音寺にあったのだから、人びとには「行基仏」として伝承され、崇められてきたものである。しかし、現在の孝恩寺の紹介では、9世紀の仏像であるとされている。行基自刻であるかはともかくとして行基集団によって造られたものだとすれば、8世紀半ばのものだとされなくてはならない。

ところで、1980年代に発行された「交通公社の新日本ガイド」シリーズの十数冊がいまだに私の手元にあり、各都道府県の名所旧跡を訪れる際の参考に使っているのだが、このガイドブックがはなはだ重宝されるのは、仏像の素材が何であるか逐一明記しているところである。『大阪府全志』に列挙されている孝恩寺の観音寺由来の仏像についても、この『新日本ガイド 17 大阪・神戸』の孝恩寺の項には「重要文化財」として列挙してあり、しかも「木造難陀竜王立像・木造跋難陀竜王立像・木造多聞天立像・木造帝釈天立像・木造弁

財天立像・木造阿弥陀如来座像・・・」として、すべてが木造であることを律儀に記している。つまり金銅仏ではなく、乾漆像でもなく、塑像でもなく、木造なのである。さすがに木積の里の仏像群であるといわなくてはならない。しかし、木造だから8世紀のものでなく、9世紀まで時代を下らせなくてはならない、というのが、日本仏像史の現在までの常識だったから、行基仏として伝承されながら、ガイドブックには平安時代のものと記されている。また、宝物庫の各仏像の説明書にも平安時代初期とか後期とか記されている。たまたま、ガイドのために立っておられた貝塚市の教育委員会の方と話をすると、われわれは文化庁にしたがうだけですから、といわれた。

その日本仏像史の通説に異を唱えたのが仏像史家の井上正氏であり、また哲学者の梅原猛氏である。両氏の共著である『人間の美術4 平城の爛熟』（小学館 1990）が写真も豊富にあってわかりやすいが、『行基事典』「第七節 行基の造仏伝承—その虚実について」は井上正氏の執筆で、日本美術史の通説の問題点が詳しく語られているので、まずそれを引用したい。

「飛鳥時代から白鳳時代にかけては、主としてクスを用いた木彫が行われた。その彫り口は銅造と同じく石彫風であった。現存する等身大前後の作例についてみれば、銅像の作例を凌駕するほどの数が遺っている。このクスを香木の一種木として考える説は早くからあった。これに次ぐ白鳳・天平時代は、塑像・銅像・乾漆像（脱活・木心）の全盛期である。奈良の大寺の主たる尊像はほとんど銅造・乾漆造・塑造で、官营造仏所の担当するところとなり、木彫は皆無に近い状況となる。現存作例および諸寺の寺院資材帳などの文献が何よりもそのことを雄弁に物語っているとす。そして官营造仏所解体後の延暦年間ごろ、すなわち8世紀の末頃から急激に木彫の新たな復権が始まり、やがて9世紀以降の日本彫刻史では木彫が主流の座を占め、翻波式衣文などを含む木彫風が新たに誕生し、以後木彫の時代は現在まで続くと言われる。

以上のような大局観にしたがって構築されてきた日本木彫史のなかでは、様式上誰の眼にも明らかな飛鳥・白鳳時代の作例を除き、一木彫の古式な仏像はそのほとんどが9世紀に置かれる。木彫が8世紀に置かれる場合はきわめて稀である。こうして、数多くの行基伝承をもつ木彫は、すべて9世紀あるいはそれ以降に置かれ、それ故に8世紀前半を指し示す伝承自体もほとんど重要視されないばかりか、むしろ史実とかけ離れたものとして一片の価値も認められなかった。やがて10世紀の半ば頃から、一木彫に混って寄木造の手法が芽生え始め、11世紀前半に至って、康尚・定朝の活躍する時期に、ほぼ完成の形をみる」（『行基事典』国書刊行会 1998 479～480ページ）

日本に仏像が招来された初めについては、『日本書紀』では欽明天皇十三年（552）、

「冬十月に、百済の聖明王、更の名は聖王、西部姫氏達卒怒唎斯致契等を遣して、釈迦仏の金銅像一軀・幡蓋若干・経論若干卷を献る」

とする記事があり、また『聖徳法王帝説』および『元興寺縁起』では、それを欽明七年戊

午の年のこととしていて、戊午の年ならば538年であり、『日本書紀』では宣化天皇三年のこととなって、混乱があるのは周知のことである。いずれにしろ、そのとき「西蕃の献れる仏の相貌端嚴し、全ら未だ曾て有ず」といわれた仏像は金銅仏であった。しかしまた、『日本霊異記』において日本人が仏像を造った最初は、その上巻の第五の「三宝を信敬ひて現報を得る縁」に記されている、それこそ和泉の国の海の中を妙なる音楽とともに流れて来て、高脚の浜（行基ゆかりの地である）に流れ着いたクスの木で、池辺直氷田に造らせたのが最初であった。『日本霊異記』には他にも木造の仏像制作のことが見える。木材の豊富な日本で木造の仏像が時代にかかわらず継続的に造られたであろうと考えることは自然なことである。しかし、奈良天平の時代にはいったん途絶え、平安時代になって復活したというのが日本美術史の現在の常識だということになる。

わたしたちが仏（像）に向き合うとき、美術史など念頭になく、祈り、願い、崇め、そして供養する姿勢であれば、その制作の年代が百年違ったところで、何も問題にするに足りないのかもしれない。しかし、その制作主体、あるいはその制作の背後にいる人びとに思いをはせながら、向かい合うと、様々な感慨が襲ってくる。孝恩寺の木造の仏像群は、奈良の大寺の、それぞれが逸品なのだが、たとえば、東大寺の法華堂や戒壇院の乾漆像や塑像群、興福寺の乾漆像群、新薬師寺の乾漆像群などとほぼ同じ時期に造られていると考えるとき、それらと対比して、同時代に生きながら、宮廷人とはまた違った環境に生きた人びと、「山がつ」といわれ、「賤の男」といわれ、「賤の女」といわれ、あるいは「柴ぶるひ人」といわれた人びとの切実な祈りと願いの造形のまた違った美しさに出会うことになる。

井上正氏は、『新装版 古仏一彫像のイコノロジー―』（法蔵館 2013）の中で、孝恩寺の弥勒菩薩像と薬師如来像の二体を取り上げ、さらに『続古仏―古密教彫像巡歴―』（法蔵館 2012）では孝恩寺の伝十一面観音像および伝勢至菩薩像の二体を取り上げている。弥勒菩薩像について、井上正氏は次のように書いている。

「この像は正面観には確実な正中線が感じられない。鼻すじ、肩、肘、膝など、どこをとってもガタガタとつながっていて、整齐感がない。肉髻の傾き、鼻梁と口の歪み、右肩のわずかな下がり、左方に対する右肘の強い締まり、右に対する左膝の伸びなど、左右の不均衡がはっきりと表わされている。側面にまわると、鼻は、仏像として低く短く、頭体ともにやや過度な厚味がみられる。とくに体部の圧倒的な量感、頭部を小ぶりにさえ感じさせる。足膝部は前後左右ともにやや縮こまった感じがあるが、これは胸腹分の厚味に圧倒された結果であろう」（『古仏』37ページ）

正中線がなく、整齐感がなく、左右不均斉で、厚ぼったい…これだけを読むと、失敗作だと悪口をいっているとしたか思えない。しかし、それこそが整齐美にきっぱりと背を向けた造詣の姿勢を示しているのだとする。正中線がないというのは、歪んでいるということなのだが、それは薬師如来像にも見られる。井上氏は薬師如来像について、次のようにいう。



写真7 〈弥勒菩薩座像〉



写真8 〈薬師如来立像〉

『歪み』は顔面にのみ表わされる，眉・眼がおおよそ左右相称を保つなかで，鼻梁が眉間から急に左方（向かって右方）へ流れ，鼻頭で再び垂直性をとりもどす。^{じんちゅう}人中から顎にかけてはわずかに元の方へ戻り気味だが，どちらかというと，流れた鼻の方により多くつく。正中線まで人中をもどしたらおそらく顔はこわれてしまうだろう。顔面の歪みはわずかなようでもその印象は強い。

左右へ高く張り，これに続く肉髻も，面幅にほぼ等しい異様な大きさを示し，丈高に彫り出された螺髪が累々と積まれてやや平たい顔を圧している。螺髪はそれほど大粒ではないが，とにかくこの頭部は重い。これは明らかに肉髻相の誇示である。そしてその形はどこか歪んでいる。脳の納まっている頭骸の強調は，如来の三十二相をあげるまでもなく明らかに，神秘的な霊能力を誇示するものだ。この勢威に圧倒されるように，金釘流とも呼びたい耳は小ぶりで無表情でさえある」（同 73～74 ページ）

井上氏は，通常の仏像は，手相や足の組み方を除き，左右相称の形を重んじ，それによって，尊像の整い澄ました心は整齐感の中に宿り，礼拝対象にふさわしい形態が約束されるのだが，その原則に挑戦するかのようになり，左右相称を否定する造形が古密教系統の尊像に相当数見られると指摘する。従来，それは木材の乾燥による歪み，工人や仏師の稚拙さに帰されていたが，そうではなく，この「歪みの造形」は意図的に造り出されたものと考えべきではないかと，井上氏はいうのである。井上氏はそれを「霊威表現」というのだが，木材そのものに精霊は宿っている。「木霊」^{こだま}とはよくいったものである。先に掲げた『日本霊異記』の和泉の海を妙なる音楽とともに流れてきたクスの木はまさに霊木であり，池辺直氷田はその霊木の中から仏が化現するのを手助けしただけなのだということにもなる。



写真9 〈跋難陀竜王立像〉



写真10 〈難陀竜王立像〉

もともと大理石の中に天使が閉じ込められていて、その天使を自由にするために彫ったのだと、ミケランジェロはいったが、行基集団の工匠たちも木の中にもともとやどった仏を自由にただけのことなのである。

梅原猛氏は井上氏が取り上げた弥勒菩薩像と薬師如来像とは別に、跋難陀竜王像と難陀竜王像に注目する。

「私好みの仏像をとり出し、いささか素人の感想をつけ加えることにしよう。それは跋難陀竜王と難陀竜王の像である。これは竜王の像であるが、まことに人間くさい像なのである。二つの竜王の頭にかぶった冠はまことに異様である。これは薬師如来の長い頭とともに、身体のアンバランスな強調を示したものであろう。

この跋難陀竜王の様相に私が感銘したのは、そのまったく男性的な凛々しさである。それに鼻筋の通った鼻、それに固く閉じられた唇、これは人間の明晰な精神と強い意志を示すものである。この二つの竜王は、いわゆる古密教の像として代表的なものであり、雨乞いの祈りに使われたものであろう。早魃に悩む田畑に雨を降らし、民衆を救うのには、よほどの知性と、よほどの意志力が必要なものであろう、この像には、そういう降雨を祈る行者の力強い、しかも落ち着いた形相があらわれているように思われる。凛然たる気迫がこの像から感じられる。

ところが一方、難陀竜王のほうはまことに穏やかな顔をしている、彫りも跋難陀竜王のように深くはなく、浅くて、それは文官のさまをしている。これはまさしく仏教の慈悲を示すのであろう。あのような強い意志を示す武官の服装をした跋難陀竜王と、このような穏和な微笑をたたえた難陀竜王の像を並べて置いたところに、私はこの像の作者の、仏教

に関する深い理解を感じるのである。この像がここにあるところをみると、行基菩薩は降雨の祈りをしたにちがいないと思って、住職の田中典彦氏に聞くと、この寺にはそういう降雨の風習が最近まで残っていたというのである」（『人間の美術4 平城の爛熟』学習研究社 1990）

日照りはそのまま不作を、そして飢餓を人びとにもたらず。雨が降るか降らないかには人びとの死活がかかっている、この二つの竜王像は人びとの雨乞いの切実な祈願、あるいは呪願を託すための像なのであろう。私はフランスのニースから北方のイタリアとフランスの国境近くにあるメルベユ渓谷をトレッキングしたことがある。標高2872メートルのモン・ベゴ（Mont Bégo）の山の斜面には青銅器時代のペテログラフ（岩刻画）が残されている。その数ざっと10万以上あるのだという。夏のあいだ、羊を放牧するために羊飼いが石を組んで作った山小屋で生活することがあるとはいえ、普通に人の住むところではない、険しい渓谷であり、高山である。青銅器時代にはすでに農耕が始まっていて、ペテログラフの中には牛が犁を引くようすを描いたものもある。地中海に面した平野部の人びとがわざわざ険しい道を歩いて水源まで遡ってやって来て、雨乞いをしたのだと推測される。その中にたとえば、「部族の長」と呼ばれている岩刻画がある。胸には牛の絵があり、トーテムなのか、あるいは半人半牛といった存在を意味してもいるのか、衝撃的なのは頭の右上に矛が突き刺さっていることである。雨乞いのために人身御供が行われたのだと想像される。雨は農耕の人びとにとって生命同様に大切なものであったと痛感させられる。

孝恩寺の仏像群の中で、私の注目した像の一つだけ挙げる。それは弁財天立像である。たいへんずんぐりとした弁天さまであり、美しいというより、親しみやすい感じの相好の像である。頭に人頭蛇身の宇賀神を載せ、八肘になっているが、もともとは二肘で、頭の宇賀神も後につけ加えたもので、別の天部の像だったのではないかともいう。弁才天とはどのような仏なのだろうか。『仏教語大辞典』は次のようにいう。

「辨才天—べんざいてん また大弁天・音妙天・美音天・大弁才功德天ともいう。ヴェーダにおいては、インドの五河地方の河神として崇拝され、後に梵天の妃とされた。音楽・弁才・財福・智慧の徳があるとされる天女形で、吉祥天とともに最も多く信仰され、仏教に入って、『金光明最勝王経』大弁才天品に詳述されて古くから造像がある。もと河の女神であったから、日本でも弁天の祀堂は湖辺・海辺にある」

弁才天はヒンズー教の河の女神であるサラスヴァティーが仏教の天部として取り込まれたものとされる。それが日本に入って来て日本風に変容していくが、



写真11 〈弁財天立像〉

江の島や竹生島，そして宮島など，やはり水辺に存在する。『金光明最勝王経』をひもとくと，たとえば，「大弁才天女品第十五の一」において，弁才天がこの『金光明最勝王経』を聴聞する者のために呪薬洗薬の法を説くのだとして，三十二味の香水で洗浴することをいい，その上で，

「この経典を読誦して，常に日夜に於て念散ぜず，専想愍懃に信心を生ぜば，所有の患苦悉く消除し，貧窮を解脱し財宝足り，四方の星辰及び日月，威神もて擁護し延年を得て，吉祥安穩にして福德増し，災変厄難皆除き遣らん」という。また呪して，「若し財を求めんものは多財を得，名称を求むるものは名称を獲，出離を求むるものは出離を得ん，必定して成就せん，疑を生ずるなかれ」

という。ちなみに，常に，「八臂を以て自ら莊嚴し，各弓と箭と刀と矛と斧と，長杵と鉄輪と並びに羂索を持す」とあって，八肘は『金光明最勝王経』の説く弁才天の姿であり，そのもちものからいえば，戦闘の女神のようでもあるが，いずれにしる，「貧窮を解脱して財宝足り」といい，「若し財を求めんものは多財を得」とあって，人びとが財福を願うことのできる弁才天は弁財天とも書かれるのは故なしとしない。竹生島の宝巖寺もやはり行基の開創と伝え，湖上の交易の成功を願う人びとの信仰を集めたのであろうが，水間寺の金融業にしる，財福という人びとのあまりに現世的ではあるが，切実さきまらない願いを背負うだけの無碍の器量とっていいものが行基の中にはあったのだと思われる。

【この論考は本学共同研究プロジェクト 23 連 296「地域文化資源の掘り起こしと活用の研究」の研究助成を受けた成果の一部である】

【参考文献】

- Dante Alighieri “Commedia” volume primo ‘Inferno’ Mondadori 2004
 Dante Alighieri “Commedia” volume II ‘Purgatorio’ Mondadori 2004
 Jacques Le Goff “La naissance du Purgatoire” Gallimard 1981
 Jacques Le Goff ‘The Usurer and Purgatory’ in “The Dawn of Modern Banking” (Center of Medieval and Renaissance Studies, University of California, Los Angeles)
 Victor Hugo “Notre-dame de Paris” Librairie Général Française 1998
 Benvenuto Cellini ‘Vita’ in “Opere di Benvenuto Cellini” Classici Italiani N.41 Unione Tipografico-Editrice Torinese 1980
 平泉澄『中世に於ける社寺と社会との関係』（至文堂 1941年第六版）
 新日本古典文学大系『続日本紀 二』（岩波書店 1990）
 新日本古典文学大系『日本霊異記』（岩波書店 1996）
 日本古典文学大系『日本書紀 上・下』（岩波書店 1965 1967）
 日本古典文学大系『西鶴集 下』（岩波書店 1960）
 日本古典文学大系『近松浄瑠璃集 上』（岩波書店 1958）
 『和泉名所図会』（柳原書店 1976年）
 井上正雄『大阪府全志 五』（清文堂出版 1922年初版 1976年復刻発行）

- 井上正『新装版 古仏一彫像のイコノロジー』（法蔵館 2013）
井上正『続古仏—古密教彫像巡歴—』（法蔵館 2012）
梅原猛・井上正『人間の美術4 平城の爛熟』（小学館 1990）
井上薫編『行基事典』（国書刊行会 1998）
井上薫『人物叢書 行基』（吉川弘文館 2017年新装版第7刷）
吉田靖男『行基と律令国家』（吉川弘文館 1987）

【掲載画像出典】

写真1から6はすべて筆者自身の撮影であり、写真7から11については、貝塚市教育委員会提供である（写真資料使用許可証：貝教委 第232号）。URLは下記記載の通りで最終閲覧日はすべて2025年11月20日である。

（写真7 孝恩寺 弥勒菩薩座像）

https://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tyoukoku/ko_mirokubosatuzazou.html

（写真8 孝恩寺 薬師如来立像）

https://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tyoukoku/ko_yakusinyorairyuzou.html

（写真9 孝恩寺 跋難陀竜王立像）

https://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tyoukoku/ko_banandaryuouryuzou.html

（写真10 孝恩寺 難陀竜王立像）

https://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tyoukoku/ko_nandaryuouryuzou.html

（写真11 孝恩寺 弁財天立像）

https://www.city.kaizuka.lg.jp/bunkazai/bunkazaidata/bunkazai/kuni_sitei/tyoukoku/ko_benzaitenryuzou.html

（2025年11月20日受理）

Southern Osaka: The Cradle of Japanese Buddhism (7)

UMEYAMA Hideyuki

Dante's "Divine Comedy" (1321) comprises three posthumous realms: Hell, Purgatory, and Heaven. According to the French medievalist Jacques Le Goff, Purgatory did not exist before the late twelfth century. Le Goff argues that the concept of Purgatory emerged to enable the salvation of usurers, who had previously been condemned to eternal damnation.

Japanese Buddhism accommodated usurers from its inception, temples themselves actively engaged in moneylending. In *Nippon Eitaigura* (日本永代蔵), Ihara Saikaku (井原西鶴) describes an Edo merchant who borrowed from *Mizuma-dera* (水間寺), prospered, repaid the loan with substantial interest, and donated funds to erect a magnificent three-stored pagoda on the temple grounds. Notably, Mizuma-dera's banking activities can be traced to the era of its founder, the monk *Gyoki* (行基).

Walking upstream along the *Kogi-gawa* (近木川) about one kilometer from Mizuma-dera, one reaches *Koon-ji* (孝恩寺), which houses the national treasure *Kuginasi-do* (釘無堂), a shrine built without nails. This shrine contained 20 wooden Buddhist statues known as '*Gyoki-butu* (行基仏)', which have long been attributed to Gyoki and his disciples in the first half of the eighth century. Modern scholarship dates them to the ninth century or later and denies any direct connexion with Gyoki. However, this view lacks firm evidence. The striking simplicity and distinctive beauty of these statues, it may be argued, reflect the religious vision of Gyoki and his eighth-century followers.